

第六章 近江地方の塔

第 39 番 龍應山西明寺三重塔—天台宗—

滋賀県犬上郡甲良町池寺

本堂が古寺保存法に基く国宝第 1 号に指定されている西明寺の三重塔を、是非見たいと思い巡礼しました。春秋のシーズンには、近江鉄道多賀大社駅から湖東三山めぐりのバスが出ており、約 25 分で参道前に着きます。

寺伝によれば、平安時代初期、琵琶湖のほとりを歩いていた三修上人が、不思議な光明が射しているのを見て、光のもとに駆けつけると、そこには古い池があったという。上人が祈ると、池から薬師如来が脇侍を従えて現れました。上人は、傍らにあった霊木で薬師如来の像を彫りました。このことが、仁明天皇に伝わり、天皇は本堂や諸堂を建立、さらに薬師如来が放った光が西方を照らしたことから「西明寺」と名づけ、勅願寺としました。またこの池の名にちなんで「池寺」と呼ばれるようになりました。



長く緩やかな石段を登り、二天門をくぐると本堂があります。本堂は、鎌倉時代の前期の創建で、後期になって増築が行われていますが、外観はほとんど解りません。本堂の右手に、内部まで見せてくれる数少ない三重塔があります。この塔は、外観の質朴さと内部の煌びやかさの共存が、魅力です。純和様、椀皮葺き、一辺 4.20m・総高さ 20.1mの塔で、建立年代を知る資料はないが、鎌倉時代後期に飛驒の匠が釘を一本も使用しないで総檜造りで完成させたものとみなされています。堂内一面に菩薩像、仏具、花鳥文、法華経相関図が極彩色で描かれ、一大曼荼羅を見る思いであります。これらの絵画は、巨勢一派の画師によって描かれたものであります。

第40番 阿星山常楽寺三重塔—天台宗—

滋賀県甲賀郡石部町

ひっそりと人目を避けるかのように国宝の三重塔を守っている常楽寺という古刹があると知り、勇んで巡礼に訪れました。寺は、石部駅から車で10分ぐらいの石部町の南にそびえる山の麓にあります。奈良時代の和銅年間に、紫香楽宮の鬼門を封じるため、良弁僧正によって、この地に東西二つの寺院が建立されました。ひとつが本寺であり西寺と呼ばれ、もうひとつが長寿寺で東寺と呼ばれ、すぐ近くにいます。

山門をくぐり、楓並木の参道を進むと背後の樹林に良く調和した檜皮葺きの本堂の威容が、眼前に迫ってきます。本尊は、千手観音菩薩増で、内陣には二十八部衆像が安置されています。

本堂背後の高台に立つ塔は、軒の出も深く、長い相輪を載せ、屋根勾配は緩やかで端は軽快に反り、安定感があり、その造形美は見るものを魅了してやみません。現在の塔は、僧・慶禅によって応永七年（1400）に再建され、一辺4.63m・総高さ23.3mの本瓦葺きであります。亀腹基壇の上に擬宝珠勾欄を付けた縁をめぐらして立ち、中央間は板唐戸、脇間は連子窓で、組物は全層和様の三手先を用い、軒も全層二軒繁垂木の平行垂木にそるなど、典型的和様形式の塔であります。

この塔の最大の特徴は、鎌倉時代になって、次第に整備され始めた枝割という方法が完成されたことです。枝割とは、垂木の間隔を基準寸法として柱間寸法を決定する方法です。この方法により、この塔では初重から三重まで垂木間隔・組物寸法も同じで、一重上がるごとに中央柱間から二本、両脇間から各一本、計四本の垂木を減らすことのみにより、上層を遞減してゆく形態を実現し、部材の標準化を完成しています。



第 41 番 姨綺耶山長命寺三重塔—天台宗—

滋賀県近江八幡市長命寺町

西国三十三霊場の第三十一番札所として有名な長命寺に、朱色の三重塔があると知り、琵琶湖を見下ろす小高い山に、巡礼に出かけました。近江八幡駅からバスに 20 分乗り、長命寺で下車し、808 段のかなり厳しい石段を登れば、山門に着きます。

この寺の縁起はかなり古いもので、長寿の武内宿禰がこの山に登り、『寿命長遠諸願成就』と柳の木に銘刻したことに始まるという。その後、聖徳太子がこの山に登り、柳の木に武内宿禰の文字と観世音菩薩の御影を感得し、開基したと伝えられています。

さらに鎌倉時代に、源頼朝の命を受けて佐々木定綱が再興し、尊海を中興の祖としました。その後おおいに栄えましたが、元龜四年信長軍の兵火で伽藍は全て炎上し、のちに僧侶たちの勧進で再興されました。

広大な本堂の右奥、木立に囲まれて建つ三重塔は、慶長二年（1597）に豊臣家の庇護を受け建立されました。擬宝珠勾欄付き縁をめぐらして立ち、組物は全層和様の三手先、軒は全層二軒繁垂木の平行垂木を用いています。おおむね和様で、総高さ 24.35m、柿葺きの流麗な構えの塔であります。桃山時代三名塔のひとつでもあります。



宮大工のざれごと一⑥鳴き龍

日光東照宮・相国寺などの堂内で天井画の龍へ向けて、拍子木を打つとあたかも天井に描かれている龍が鈴のような鳴き声を発しているように聞こえるので、「鳴き龍」と呼ばれて不思議がられています。

これは拍子木を打った音が、天井と床の間で反射し共鳴し、音の多重反音（残響音）が発生するためです。宮大工が、天井と床の板厚とそれらを支える構造に工夫を重ねて、フラッターリング現象を起こすように造りだした結果です。

第 42 番 長等山園城寺三重塔—天台寺門宗—

滋賀県大津市園城寺町

めぐりめぐって吉野山の比蘇寺からやってきた三重塔を拝観するため、園城寺へやってきました。私は、大門をくぐらず観音堂から境内を拝観するルートが好きなため、京阪三井寺駅から琵琶湖疎水に沿って、心地よい水音を聞きながら歩きます。石段を登ると観音堂があり、大津の街並み美しい琵琶湖が最初に一望できるからです。特に桜のシーズンは、最高です。

園城寺は、大友皇子の子・与多王が「田園城邑」すべてを寄進し寺院を建てたのを、天武天皇が称えて、与多王に「園城寺」の勅額を贈り、これが正式名の由来になりました。金堂の左側には、閼伽井屋が立ち、中には石組みの井戸があります。この井戸は、寺の創建以前からあり、天智・天武・持統各天皇の産湯を汲んだとされ、井戸は「御井」と呼ばれるようになり、これが三井寺という通称の語源になっています。創建後は、大友氏の氏寺となったが、やがて衰退しました。大寺に発展したのは、天安二年に唐から帰国した円珍が住職の座に就き、やがて本寺は比叡山の別院となり、円珍が比叡山の座主となったことにあります。その後は、山門派と寺門派に別れ、お互いに争いを繰り返した。現在の堂宇は、ほとんど慶長年間に再建されたものです。なかには、諸大名より他の寺院から移築されたものも数多くあります。大門は、宝徳四年・常楽寺に建てられたものを、豊臣秀吉が伏見城に移し、さらに慶長六年に徳川家康が三井寺に寄進したとされています。ほぼ同じ経緯を辿っているのが、三重塔で、比蘇寺の東塔を移したものです。一切経蔵は、山口県の国清寺から毛利輝元によって、この地へ移されたものです。

三重塔は、おおむね和様で、一辺 4.84m・総高さ 24.74m、本瓦葺き、当初の建立は、南北朝時代といわれています。



第 43 番 石光山石山寺多宝塔—東寺真言宗—

滋賀県大津市石山寺

石山寺へは、京阪石山寺駅から瀬田川に沿って、徒歩 10 分で東大門につきます。西国三十三所巡礼の第十三番札所として、あるいは「源氏物語」誕生の地として、多くの人を訪れます。

石山寺の由来は、東大寺初代別当だった良弁が大仏建立に使う金塊を探し、天平勝宝元年、お告げに従い、近江田上にあった石山の上に観音像をおいて祈ると、東北地方で初めての金が発掘されました。一方で観音像は石から離れなくなり、良弁は像を覆うお堂を建てたことによります。

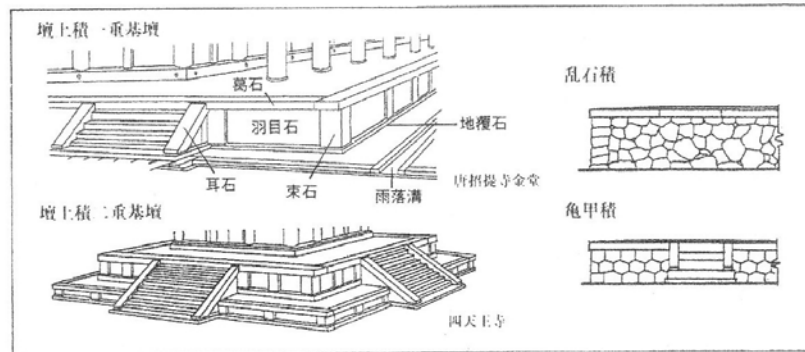
本堂は懸造り建築で、内陣は平安時代中期、下陣は淀君の修補になるものです。境内の奇岩は、いわゆる石山の名の出た石で、石灰岩がマグマの噴出による熱作用で変化した珪灰石です。ひとつの塊が相当な大きさと、それらが屹立して巨大な崖となっています。あたりには木々が生い茂り、新緑や紅葉が奇景を包み込んで、一層ひきたてています。

多宝塔は、建久五年（1194）に源頼朝の寄進により建立されたもので、創建時の姿をとどめる多宝塔としては日本最古とされています。総高さ 17.2m、檜皮葺きで、多宝塔の中で最も美しい造形美を示すといわれています。三大名塔のひとつでもあります。

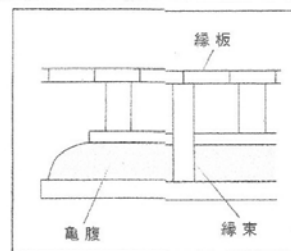


宮大工の知識—VI基壇と礎石

基壇 建物を建てる場合、水はけを良くするために、周囲より少し高くする必要がある。寺院建築の場合は、さらに高く、ととのった石の壇(基壇)の上に建っている。建物の縁・床を設けない場合には、基壇を築いて建てるのが普通である。



亀腹 建物の縁の下にかまぼこ状の土壇を見かけるが、亀の腹に似ていることから亀腹という。縁のある建物しか用いられない。



礎石 掘立柱の建物に代わって仏教建築の建立が開始されたときに、木造建築の柱は礎石の上に立つようになった。礎石には次のようなものがある。

- ・自然石の上面を平らにした程度のもの
 - ・柱のあたる部分に円座を造り出したもの
 - ・中心部に突起をもつもの
- 等々。
- 塔の心柱が立つものを心礎という。